

宮崎市文化財調査報告書 第95集

たか おか ふもと い せき
高岡麓遺跡第33地点

歴史的まちなみ整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2013

宮崎市教育委員会

第 I 章 位置と環境

第 1 節 地理的位置

本書に報告する高岡麓遺跡が所在する宮崎市高岡町は、宮崎市の西部、海岸部の平野から九州山地へと続く内陸丘陵の入り口に位置する。多くが丘陵によって占められるが、その中央を県下最大の河川である大淀川が東流し、それによって河岸段丘、狭小な沖積地が形成される。

高岡麓遺跡は大淀川と飯田川に挟まれた沖積地に位置し、現在の高岡地区における中心市街地となっている。旧飯田川を東端、浜子地区を西端、天ヶ城跡を北端、大淀川川岸を南端とする海拔高 12～17m の、広範囲に広がる遺跡である。近世における薩摩藩外城としての性格を主とするが、三方を山で囲まれ、一方は川に面し、防御的要素を供えた立地となっている。

第 2 節 高岡麓遺跡について

高岡麓遺跡は過去 33 地点に及ぶ調査によって、古墳時代から古代、中世、近世の多岐にわたる時代の遺構、遺物が検出されているが、その中心となるのは、近世の薩摩藩外城としての高岡麓である。

高岡麓は、藩領東側防御の要として位置付けられた、薩摩藩最大級の外城である。関外四ヶ郷（高岡・穆佐・綾・倉岡）の中心として、薩摩藩の支藩である佐土原へと通じる重要な街道沿いに位置し、その範囲は 60ha に及ぶ。

島津義弘によって関ヶ原の役直後の慶長 5 年（1600 年）から翌 6 年春にかけ、天ヶ城の南麓に形成され、領内各地から 516 戸の郷士が移住した。前線基地としての役割を荷うため、100 石超の禄高の高い郷士が多く集められた。

天ヶ城は築城間もなく廃城となり、以降は地頭仮屋（現、高岡小学校）を中心として武士団が集住した。先述のとおり、高岡麓遺跡では中世の遺構も検出されており、中世以来の集落を都市的に整備した麓と言える。直線街路を主体とし、矩形街区を目指した計画的なものであり、近世初期の薩摩藩の麓のうち、初期の計画的街路形態を残したものである。

地勢的には山と川に囲まれて極めて防御性が高く、天ヶ城山裾の地頭仮屋を起点に大淀川まで直線的に伸びる南北道と、それに直交する東西道を主道とし、計画的に屋敷群が配置される。町家群を有す数少ない麓であるが、郷士屋敷群と町屋敷に分割されている。

高岡麓の屋敷構えは門・主屋・副屋「ナカエ」・蔵からなり、街道に対し棟を直角に配置する。また半農の郷士ゆえに、屋敷地の奥に畑や納屋を有する。現存する門構えは高岡麓武家門群と通称される。

鹿児島県内の麓では屋敷を石垣で囲うことが普通であるが、高岡麓では、土留めを必要としない平坦な地勢もあってか、石垣は用いられず、二重の竹垣で囲われる。石垣を用いることが認められず、嘉永年間によく許されたとも言う。

本書に報告する第 33 地点は、地頭仮屋である現高岡小学校の南に隣接した区画の南東の角地に位置し、南北街道に面して門を構えた武家住宅、吉富家住宅として知られる箇所である。



第1図 周辺遺跡位置図 (Scale : 1/50,000)



第2図 調査箇所位置図 (Scale : 1/1,000)

第 II 章 発掘調査成果

第 1 節 調査に至る経緯

平成20年10月16日、武家住宅再築工事事業に伴い、宮崎市高岡総合支所建設課より、教育委員会文化財課あて、高岡町内山2879番地における確認調査実施の依頼があった。当該地一帯は近世における薩摩藩の外城を主体とする周知の埋蔵文化財包蔵地「高岡麓遺跡」となっており、文化財課では平成20年10月22日に確認調査を実施し、遺構および遺物の遺存を確認した。

これをうけ、高岡総合支所建設課と文化財課で埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を行い、工事掘削の及ぶ範囲において発掘調査を実施することとなった。

現地における発掘調査は平成20年11月20日～12月25日の期間実施した。調査面積は、236㎡である。また整理作業は平成23年9月5日～平成24年3月30日の期間実施した。

第 2 節 調査成果

(1) 概 略

中世～現代までの遺構・遺物を多数検出、出土した。

本遺跡では近世までを埋蔵文化財として扱い、明治以降は対象外として調査を行った。地山は褐色のローム土であり、その上に中世～現代までの造成土が5～6層堆積していた。

調査の結果、土坑19基、掘立柱建物2棟、溝状遺構2条、ピット150基を検出した。出土遺物は江戸期の陶磁器片が主を占めるが、土坑から14世紀の龍泉窯系青磁椀が完形で出土している。

(2) 遺 構

【土 坑】

SC1

径約0.8m、深さ1.3mの平面円形の土坑である。18世紀後半～19世紀初頭の肥前広東椀、19世紀の平戸三川内の根付等が出土している（第8図14～16）。

SC2（第5図）

すり鉢状の断面形を呈す、平面楕円形の大型の土坑である。一部を攪乱によって削平されているが、短軸2.7m、長軸3.7m以上、深さは最深で30cmである。堆積土中にはマンガンの沈殿物が含まれており、水に関係する遺構と思われる。肥前の椀、皿、猪口等が出土しており（第9図17～21）、時期はおおむね18世紀前半に集中している。

SC3

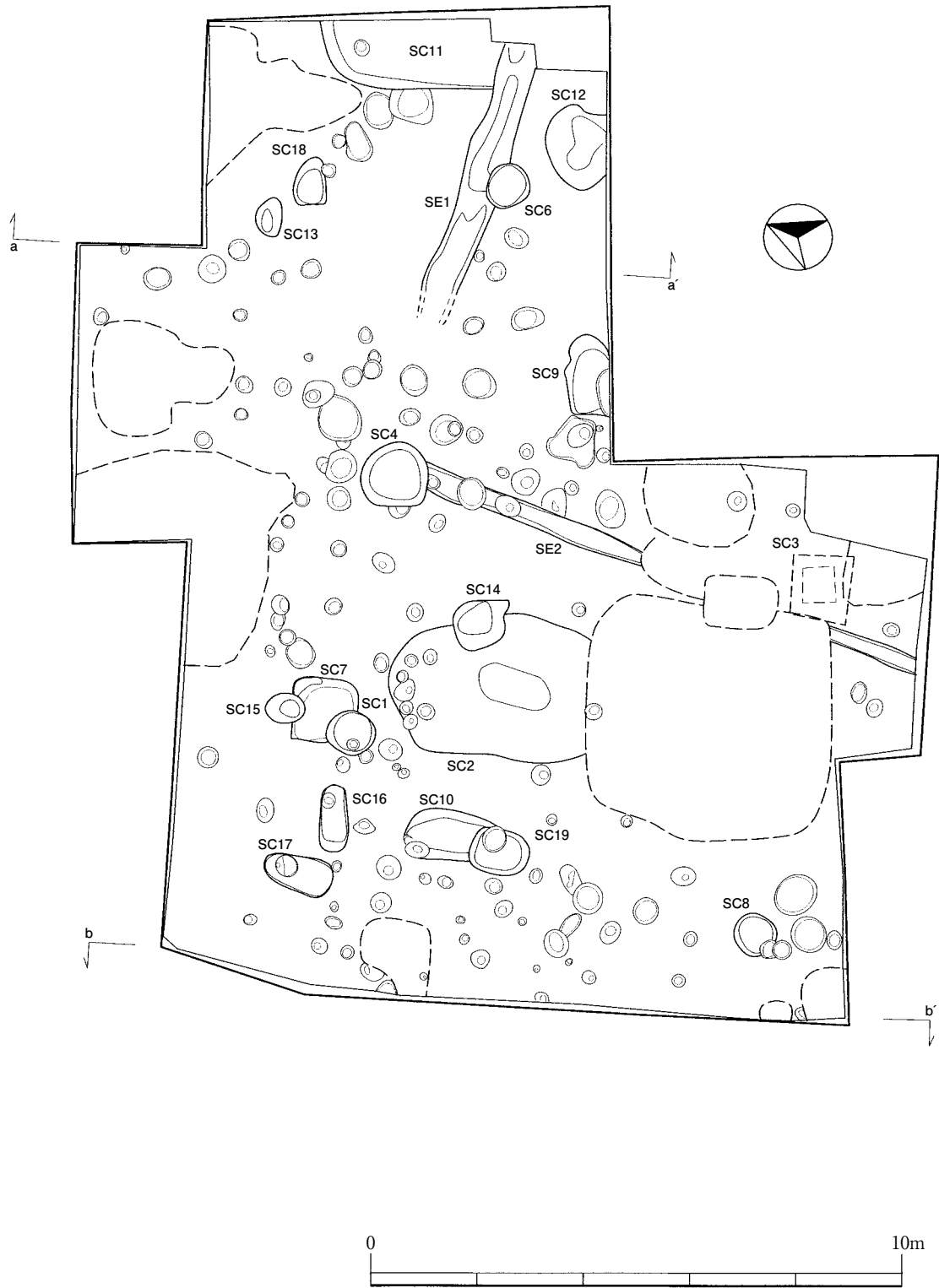
辺1m、深さ約30cmの平面方形の土坑で、壁面には石積みが見られた。肥前の染付椀や蓮華、薩摩の小瓶や播り鉢、火炉等、遺物は多数出土しており、1点のみ17世紀後半～18世紀前半のものがあるが（第9図30）、他は1800年前後のものであり、おおむね19世紀中葉までにおさまるようである（第9図22～31）。

SC4（第5図）

径1.26m、深さ35cmの平面円形の土坑である。遺物の出土はない。

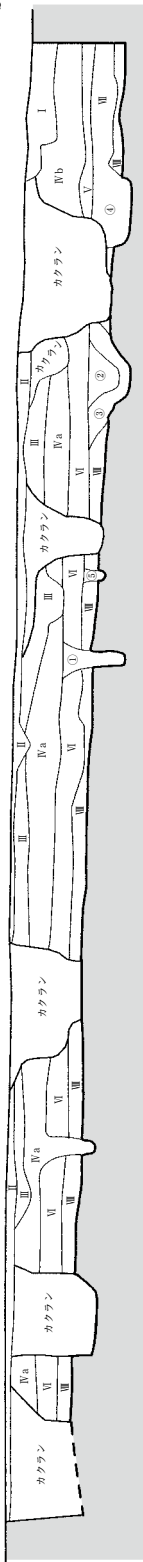
SC6

径0.85m、深さ20cmの平面円形の土坑である。遺物の出土はない。



第3図 調査区遺構配置図 (Scale : 1 / 120)

15.500m
b



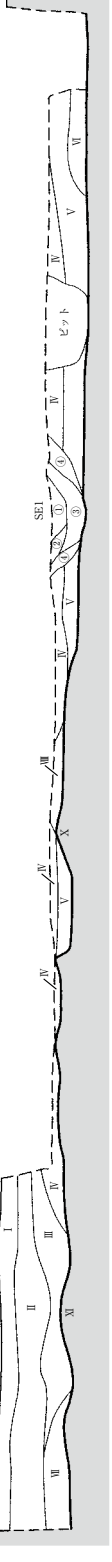
- I 擾乱、遺成土、客土
- II 表土
- III 赤褐色土：1cm以下の白色、赤色粒子を含む。小礫含む
- IIIa 暗褐色土：1cm以下あり。1cm以下の褐色プロロクを少量含む。5mm程度の褐色粒子、小礫を多量に含む
- IV 暗褐色土：5～10mm程度の褐色プロロクを含む。小礫、棕色、白色粒子を少量含む。赤褐色土がまだらに入る。鉄分を少量含む。砂質土
- V 褐色土：中近根における遺成土（遺物を含む。遺物検出面）。硬くしめる。1～5mm程度の褐色プロロクを少量含む。砂質土
- VI 灰褐色土：中近根における遺成土（遺物を含む。遺物検出面）。硬くしめる。1～3mm程度の褐色プロロク、1～5mm程度の赤色粒子、灰化物を多く含む。砂質土
- VII 暗褐色土：1cm以下あり。VI、VII層の灰褐色土がまだらに入る。地山（褐色ローム）との境界線
- pit① 灰褐色土：褐色プロロクを含む。粘性あり
- pit② 暗褐色土：灰化物、赤色粒子を含む
- pit③ 灰褐色土：褐色プロロクを含む
- pit④ 灰褐色土：VII層とはほぼ同じ。同時期。埋め土
- pit⑤ 灰褐色土：VII層とはほぼ同じ。同時期。埋め土

15.500m
b'



- I 表土
- II 暗褐色粘質土：客土、互層多量を含む
- III 暗褐色粘質土：包含層。径5mm程度の褐色粒子多量を含む。極めて硬くしめる
- IV 褐色粘質土：包含層。径5mm程度の褐色粒子多量を含む。硬くしめるが、粘性は低い。暗褐色色の塊が入る
- V 褐色粘質土：IVに近似するが、明度がやや低く、IVに比してやや細かい
- VI 暗褐色粘質土：包含層。径5mm程度の褐色粒子およびマンガン粒子を多量に含む。極めて硬くしめる。一見、地山状
- VII 暗褐色粘質土：包含層。径23mm程度の褐色粒子をまばらに含む。極めて硬くしめる。一見、地山状
- VIII 暗褐色粘質土：地山。極めてやわらかい
- IX 暗褐色粘質土：地山。粘性がややあり、マンガンの量を多量に含む
- X 暗褐色粘質土：地山。IXに似るが、マンガン含量を5mm程度の粒子として含む。やや粘質土に近い
- XI 灰褐色粘質土：地山。極めて硬くしめる。径5mm程度のマンガン粒子を多量に含む
- SEI① 暗褐色粘質土：径5mm程度のマンガン粒子を含む。ややしなりなし
- SEI② 灰褐色粘質土：やや粘質。マンガン粒子を含む
- SEI③ 暗褐色粘質土：硬くしめる。粘性なし。見片等を含む
- SEI④ 暗褐色粘質土：XIVに似るが、やや粘質

15.500m
a

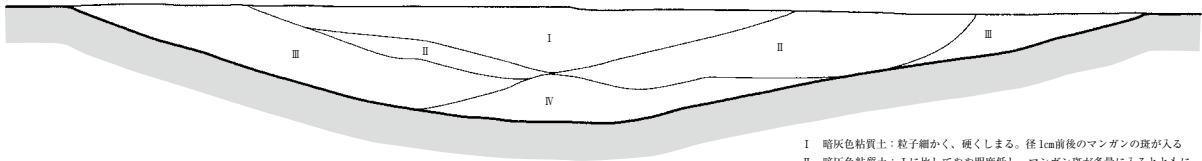


第4図 調査区土層断面図 (Scale : 1 / 50)

14.500m

14.500m

SC2

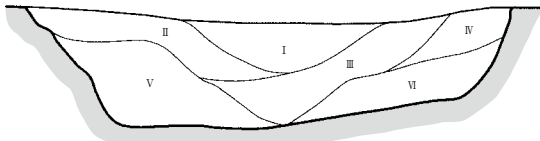


- I 暗灰色粘質土：粒子細かく、硬くしまる。径1cm前後のマンガンの斑が入る
- II 暗灰色粘質土：Iに比してやや明度低し。マンガン斑が多量に入るとともに、径1～5cmの地山ブロックを多量に含有
- III 暗灰色粘質土：IIに似るが、径1cm程の地山ブロックがまばらに入るほか、含有物はない
- IV 暗褐色粘質土：粒子こまかく、やややわらかい。マンガン斑が多量に入るとともに、径1cmほどの地山ブロックを多量に含有

15.000m

15.000m

SC4

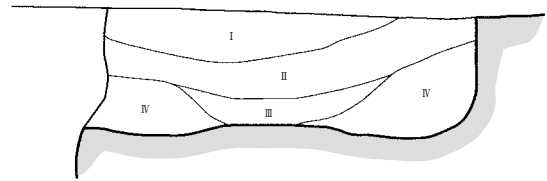


- I 暗灰色粘質土：粒子粗く、ケバ立つ。小石、炭等多量に含有
- II 暗灰色粘質土：Iに似るが、含有物は少なく硬くしまる
- III 灰色粘質土：粘土状に硬くしまる。湿性高し。径1mm程度のマンガンの斑を多量に含有
- IV 暗灰色粘質土：粒子粗く、ケバ立つ。黄色粒子が斑に入る
- V 灰色粘土：極めて固くしまる。含有物なし
- VI 灰色粘土：Vに似るが、地山ブロック、炭等を含有。Vに比してしまりが無い

15.000m

15.000m

SC7

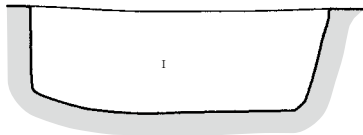


- I 褐色粘質土：粒子細かく硬くしまる。ただし小石、炭、地山ブロック等多量に含有
- II 暗灰色粘質土：粒子やや粗く、やわらかい。炭、マンガン等多量に含有
- III 暗灰色粘質土：粒子こまかくやわらかい。粘性、湿性高し
- IV 暗褐色粘質土：IIIに似るが、地山ブロックを多量に含有

15.000m

15.000m

SC8

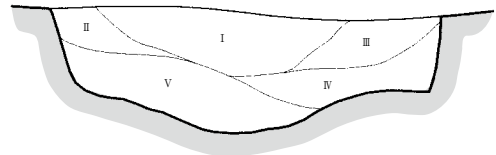


- I 暗褐色粘質土：粒子細かくやややわらかい。粘性、湿性高し。地山粒子・ブロックを多量に含有。人為的な埋め戻し土と思われる

15.000m

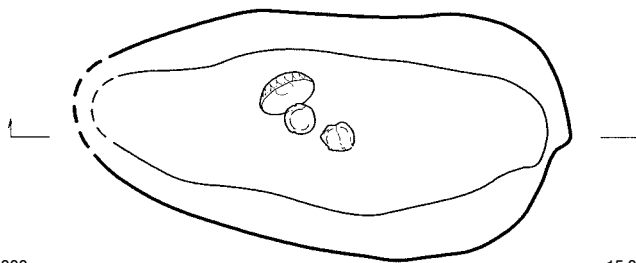
15.000m

SC9



- I 暗灰色粘質土：粒子がやや大きく、粘性高し。小石、炭等含有
- II 暗灰色粘質土：Iに比して粒子小さいが、粘性高し。炭をまばらに含有
- III 暗灰色粘質土：IIに類似するが、地山ブロックを多量に含有
- IV IIに類似するが、地山ブロック、炭をまばらに含有
- V II～IVに類似するが、地山ブロック含まず。炭、径5mm程度の橙色粒子含有

SC10



15.000m

15.000m

- I 暗褐色粘質土：粒子細かく、やややわらかい。含有物ほとんどなし
- II 暗灰色粘質土：粒子細かく、硬くしまる。地山ブロックを径1mm以下の斑でまばらに含有
- III 暗褐色粘質土：粒子細かく、硬くしまる。地山ブロック多量に含有



第5図 土坑土層断面図 (Scale : 1 / 20)

S C 7 (第5図)

辺1.2m、深さ35cmの、ほぼ正方形に近い平面形の土坑である。17世紀中葉～18世紀前半の肥前の壺ないし甕と、18～19世紀前半の薩摩の皿が出土している(第9図32・33)。

S C 8 (第5図)

径0.8m、深さ30cmの平面円形の土坑である。遺物の出土はない。

S C 9

一部が調査区外へと出る平面不整円形の土坑で、長軸1.5m、短軸0.8m以上、深さ30cmである。遺物の出土はない。

S C 10 (第5図)

長軸1.2m以上、短軸0.6m、残存深10cmの、平面楕円形の土坑である。完形の龍泉窯系青磁椀と糸切底の土師器皿がまとも出土している(第9図34～36)。青磁椀は14世紀のものである。土師器皿は細かな年代比定が困難な遺物であるが、少なくとも、青磁椀の年代観との間に齟齬はない。上部のほとんどを削平された状態であるが、遺構の性格としては、その形状や遺物内容から、土坑墓の可能性が考えられる。

S C 11

調査区東際で、一部を検出した、平面方形と推定される大型の遺構である。南辺を溝状遺構S E 1に切られるが、長3.8m前後と推定され、深さは50cmである。床面よりピット1基を検出しているが、本遺構に伴うものではない。遺物は薩摩の壺ないし甕や肥前の皿、椀、糸切り底の土師器皿等が出土しているが、時期は17世紀前半、17世紀後半、18世紀後半～19世紀前半とばらつきがある(第10図37～42)。また39は二次被熱の可能性がある。

S C 12

径1.5m、深さ30cmの平面不整円形の土坑である。遺物の出土はない。

S C 13

径0.7m、深さ60cmの平面不整円形の土坑である。遺物の出土はない。

S C 14

先述のS C 2を切る形で検出された径1.2m、深さ20cmの平面不整円形の土坑である。糸切底の土師器坏が出土している(第10図43)

S C 15

先述のS C 7を切る形で検出された径0.7m、深さ60cmの平面円形の土坑である。遺物の出土はない。

S C 16

長辺1.3m、短辺0.55m、深20cmの平面長形状の土坑である。遺物の出土はない。

S C 17

長辺1.3m、短辺0.7m、深10cmの平面長形状の土坑である。糸切り底の土師器坏が出土している(第10図44)。

S C 18

径0.9m、深さ0.25mの平面不整円形の土坑である。16世紀末～17世紀前半の瀬戸美濃の天目茶碗が出土している(第10図45・46)。

S C 19

前述の S C 10を切る形で検出された径1.1m、深さ30cmの平面円形の小型の土坑である。遺物の出土はない。

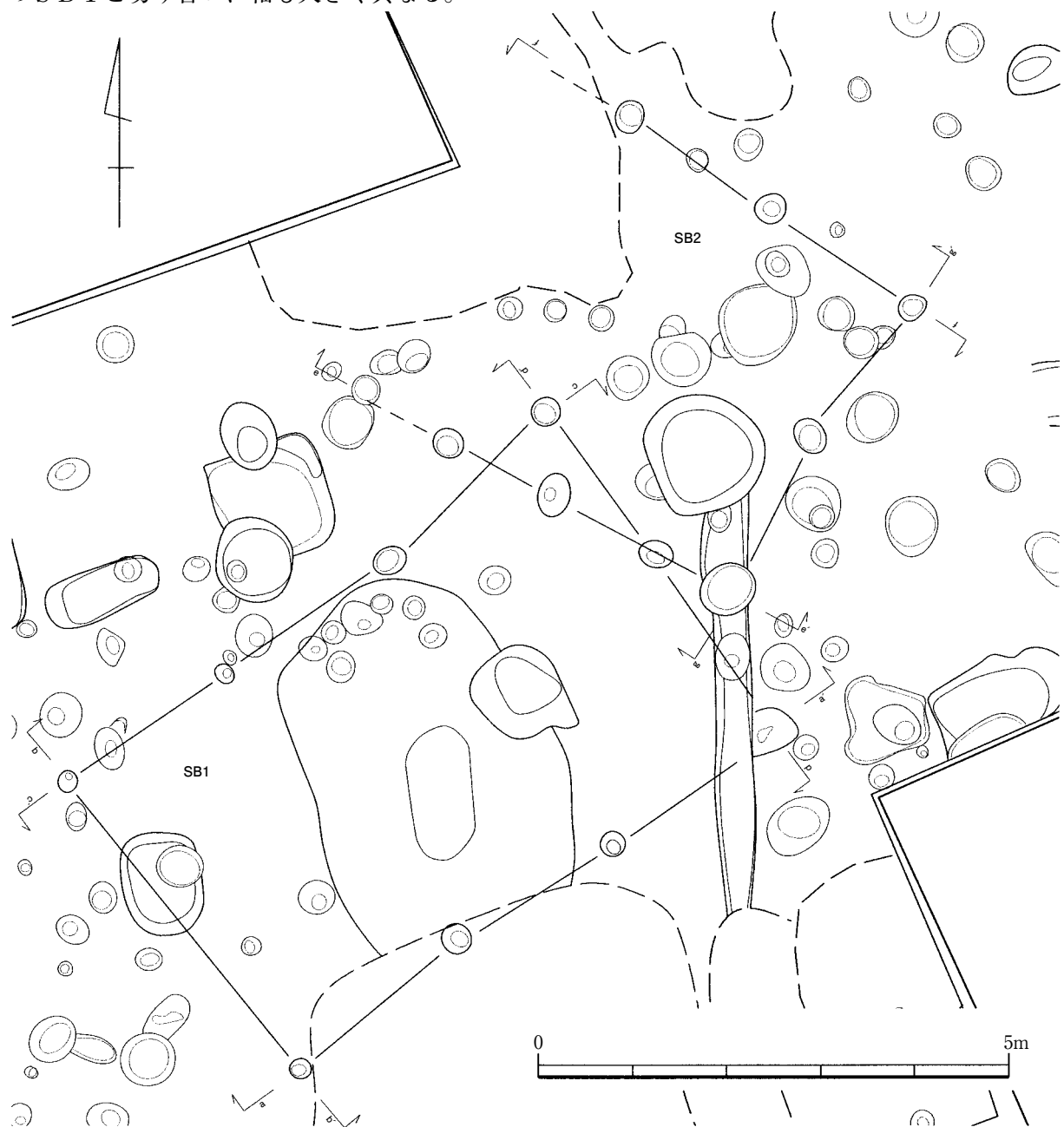
【掘立柱建物】

S B 1

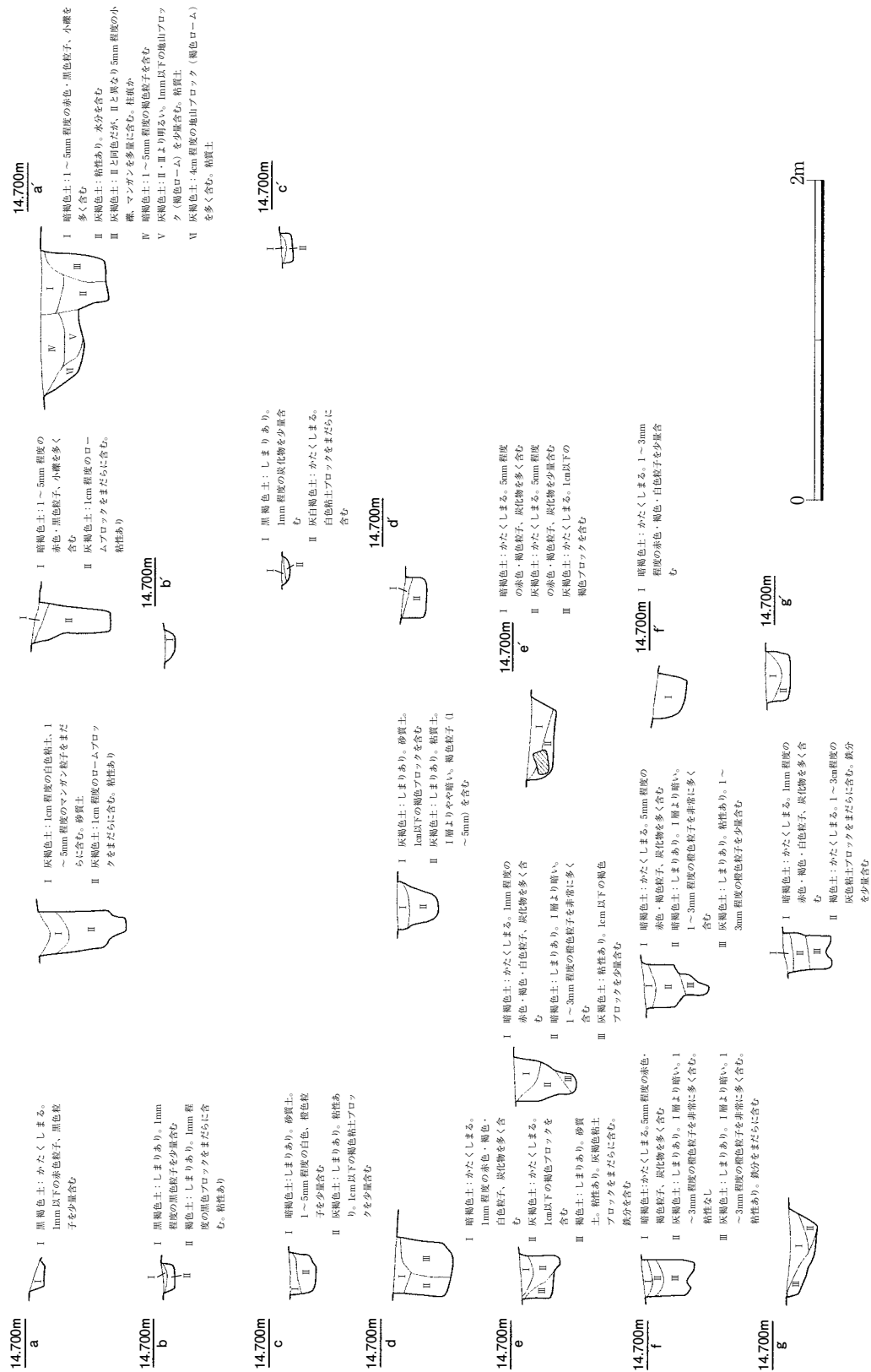
桁行き2間(4.1m)、梁行3間(6.2m)の掘立柱建物である。面積26.0㎡、棟方向N-52°-Eで、柱穴の深さは5~55cmである。

S B 2

調査区北端において検出され、攪乱によって切られるため全体の規模は不明である。桁行き2間(3.6m)、梁行2間以上(1間1.9m)、棟方向N-56°-Eで、柱穴の深さは15~43cmである。前述のS B 1と切り合い、軸も大きく異なる。



第6図 掘立柱建物平面図 (Scale : 1 / 70)



第7図 掘立柱建物土層断面図 (Scale : 1 / 40)

【溝状遺構】

S E 1

調査区東側で検出した東西方向の小規模な溝で、検出長5m、幅最大0.8m、深さは最深で60cmである。西に行くにつれて浅くなり、削平によって収束する。遺物は古代の土師器甕、17世紀代を中心とした陶磁器類が出土している（第10図60～64）。

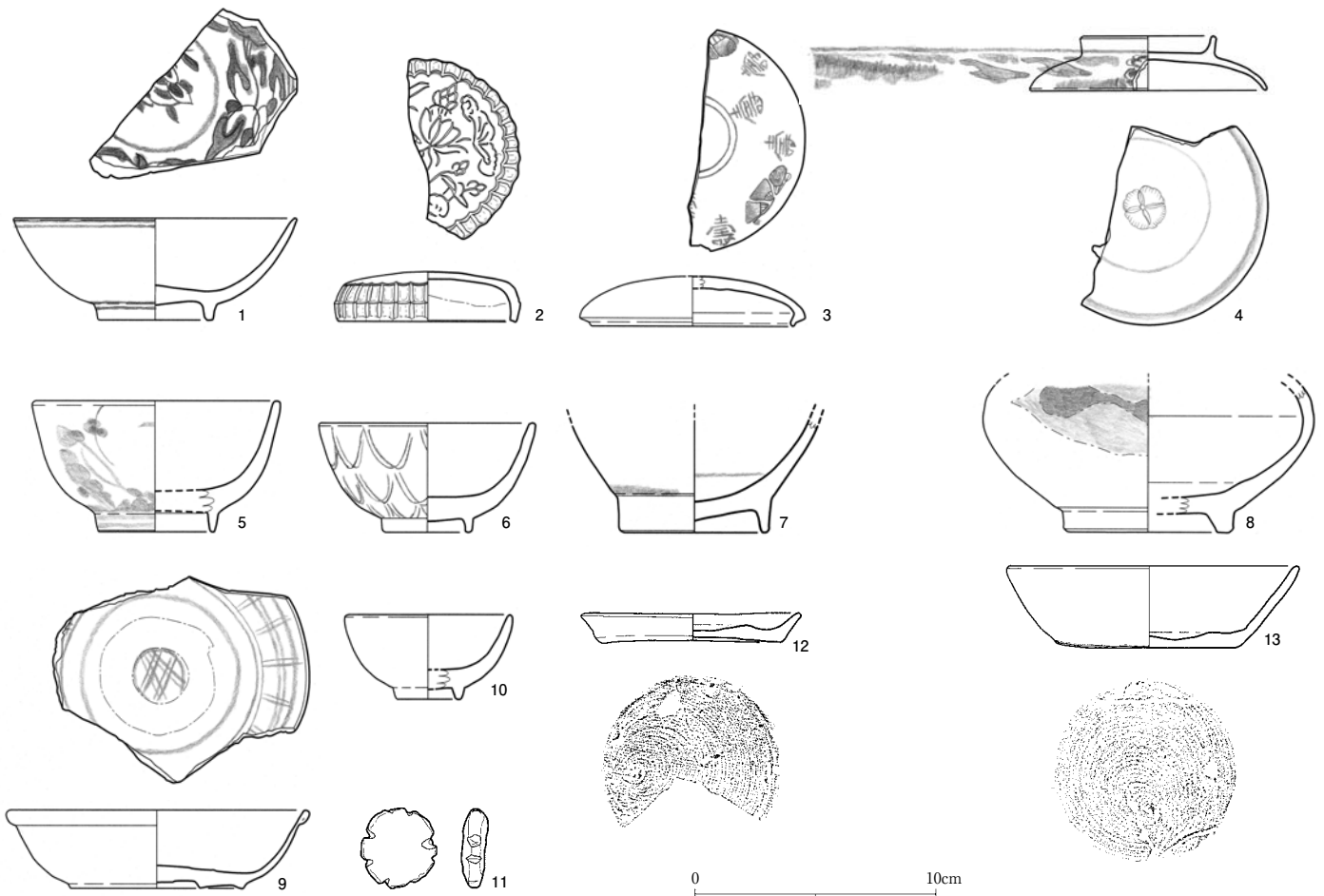
S E 2

調査区のほぼ中央で検出した南北方向の溝で、先述の土坑S D 4に切られた地点で収束する。検出長9.9m、幅最大0.5m、深さは最深で15cmである。土師器甕の口縁部が出土している（第10図65）。S E 1とほぼ直交方向に流れを持ち、規模も似ることから、あるいは一連の方形溝かとも思われる。

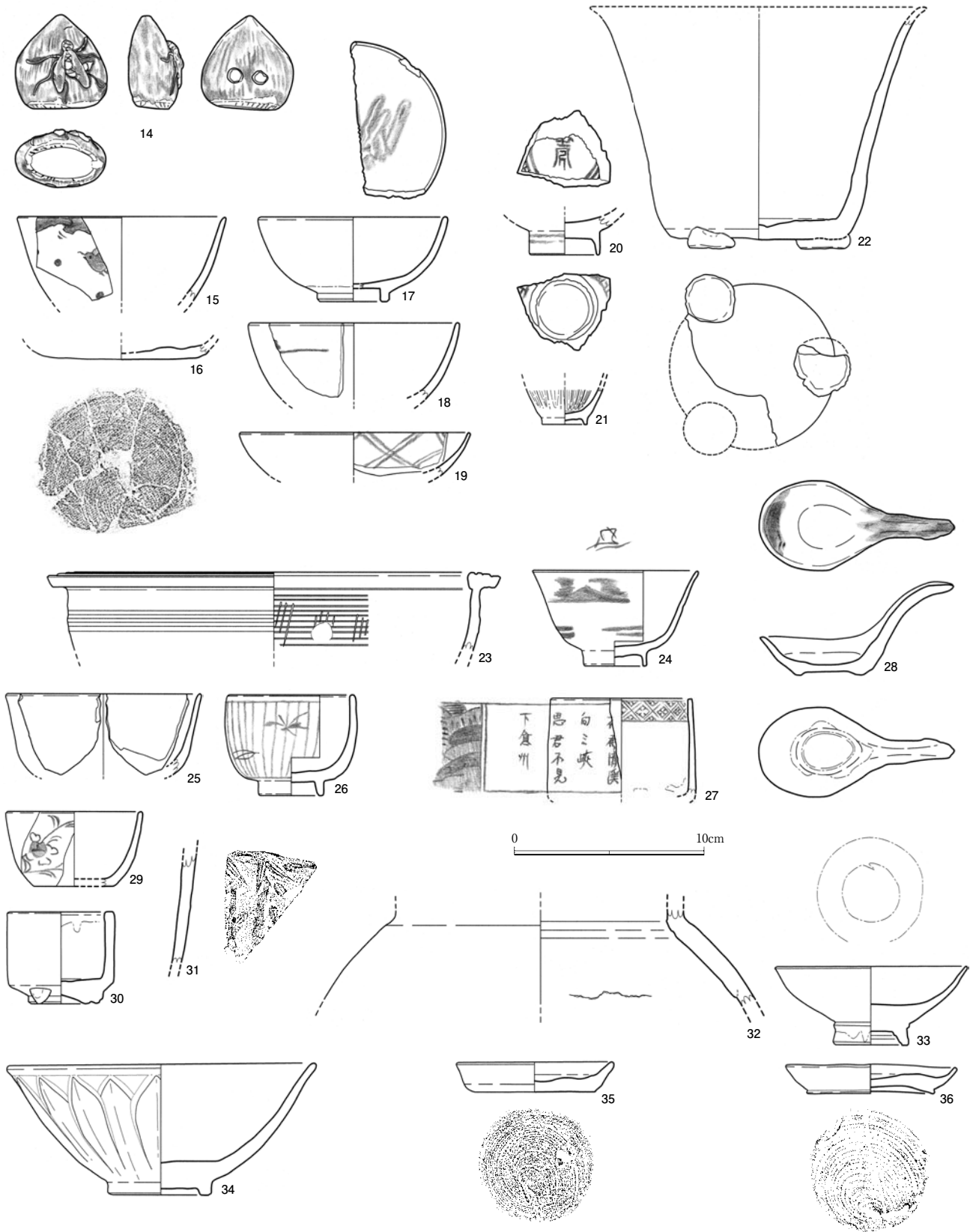
(3) 遺物

各遺構、包含層より陶磁器類を中心として遺物が出土している。近世陶磁が中心であるが、古代、中世、近代の遺物も散見される。

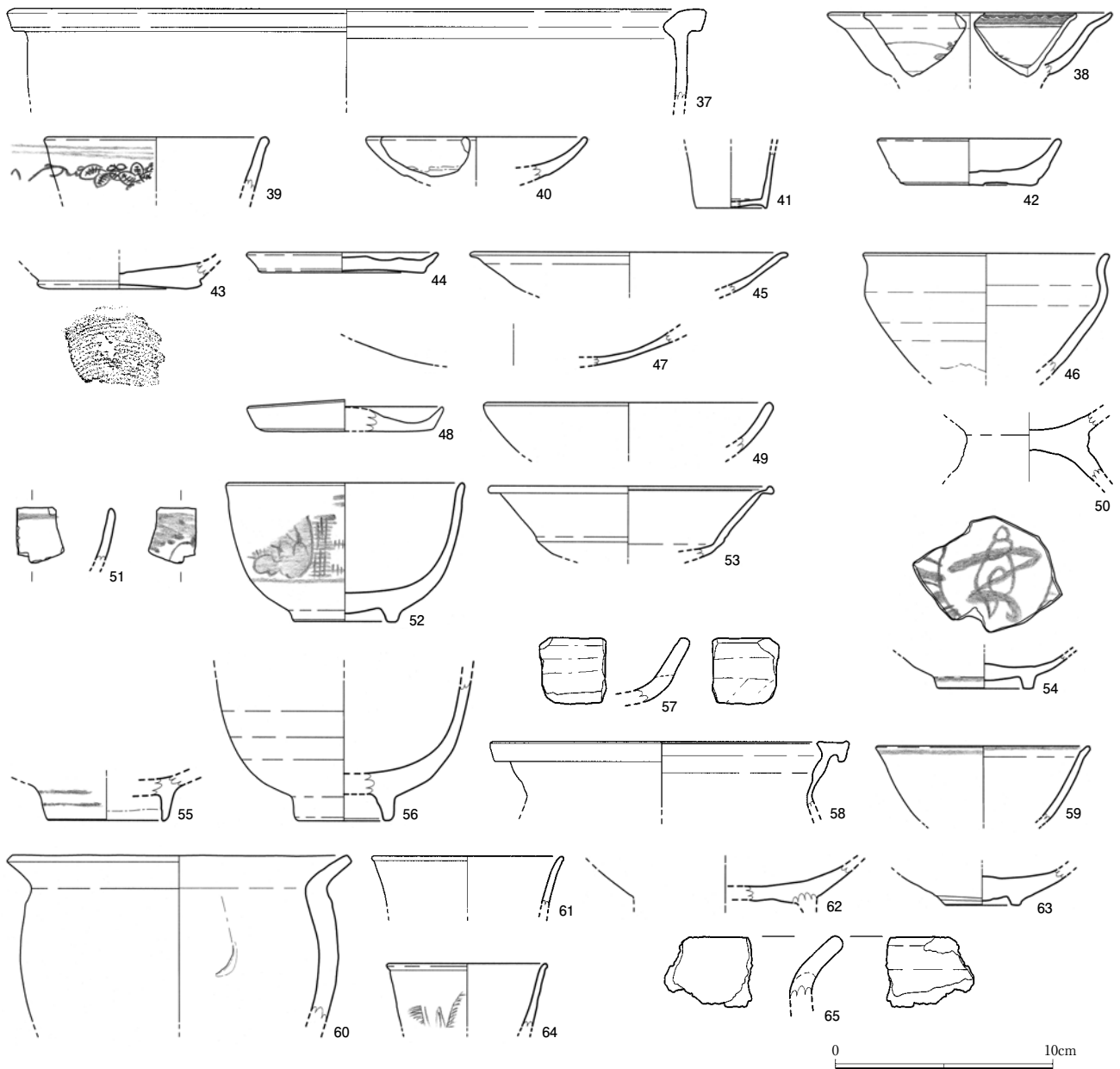
以下、特筆すべきものについて述べるが、各遺物の詳細については出土遺物観察表にまとめてい



第8図 出土遺物実測図① (Scale : 1/3)



第9図 出土遺物実測図② (Scale : 1/3)



第10図 出土遺物実測図③ (Scale : 1/3)

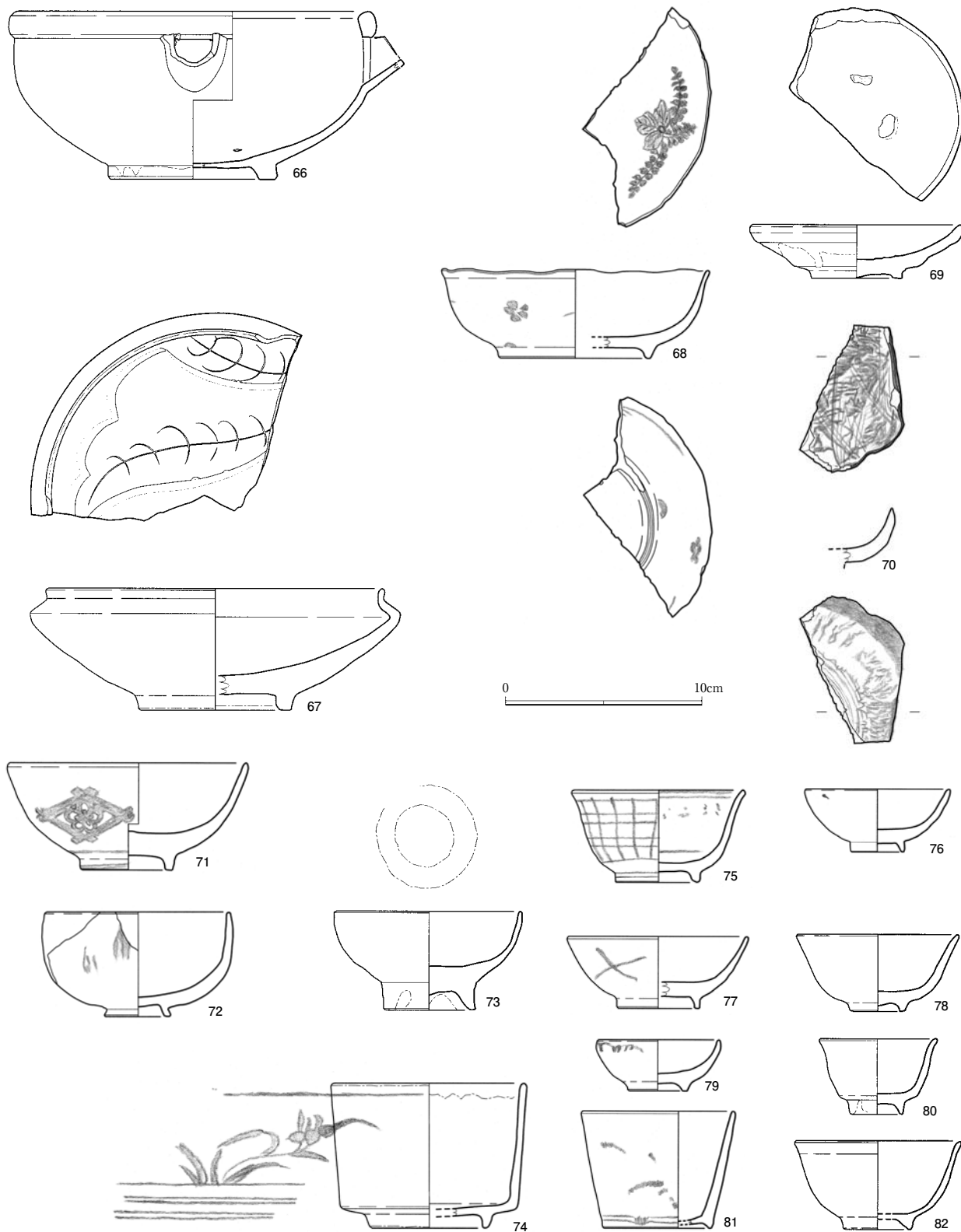
るので、参照いただきたい(第1・2表)。

【確認調査時出土遺物】(第8図)

1～13は、本調査に先立ち3本のトレンチを設定して行った確認調査時に出土した遺物である。18世紀後半～19世紀前半の肥前の製品が多いが、13世紀南宋代の青白磁合子蓋(2)や、1700年前後の福建省漳州窯の皿等も含まれる。

【土坑出土遺物】(第9・10図)

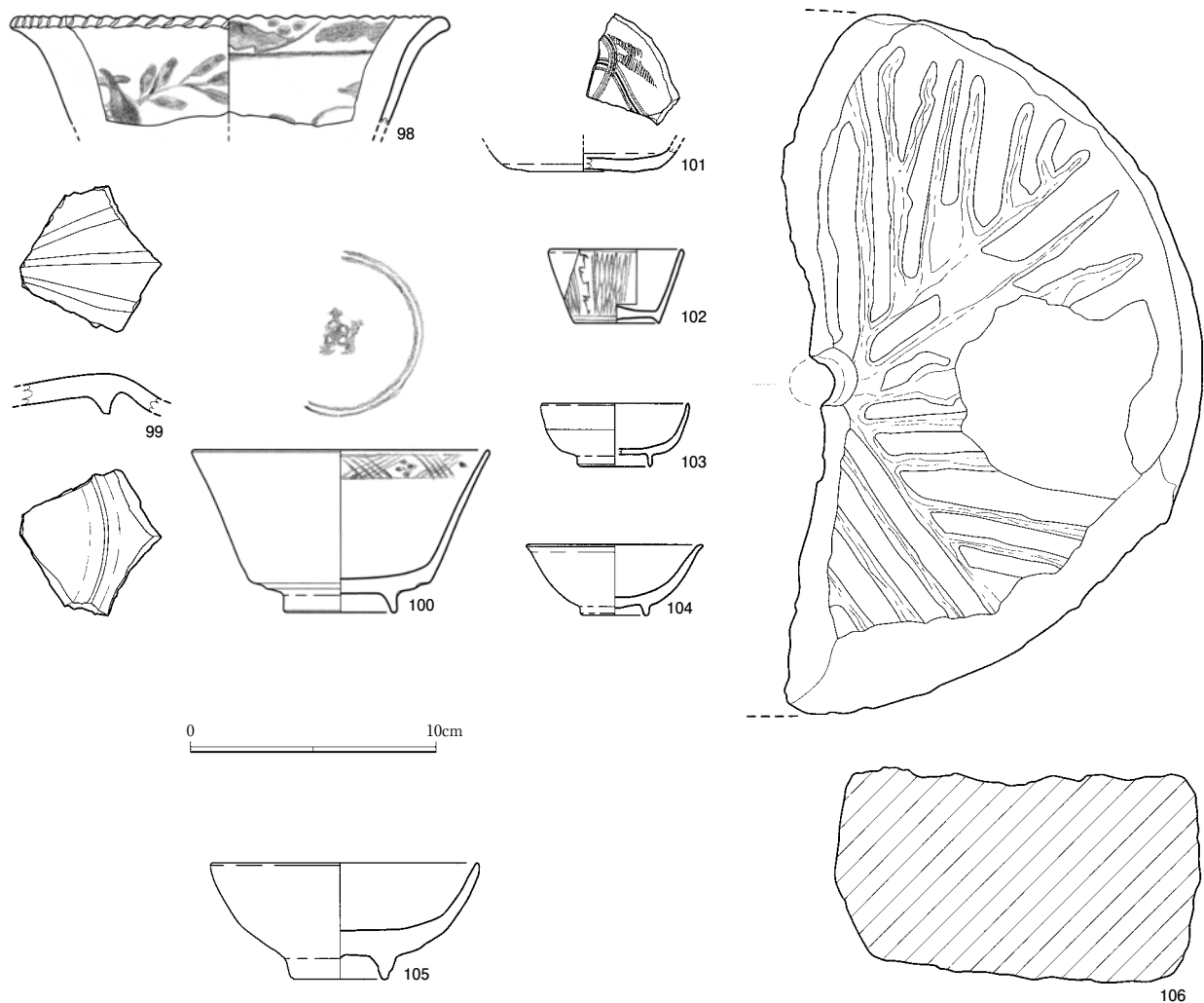
14～46は各土坑出土の遺物である。概ね各土坑毎に時期のまとまりもあるが、先述のSC11については、17世紀前半～19世紀前半とばらつきがある(第10図37～42)。また特筆すべきはSC10より出土した完形の龍泉窯系青磁碗(14世紀)であろう(34)。



第11図 出土遺物実測図④ (Scale : 1/3)



第12図 出土遺物実測図⑤ (Scale : 1/3 ※91・92 Scale : 1/1)



第13図 出土遺物実測図⑥ (Scale : 1/3)

【ピット出土遺物】(第10図)

47～59はピット出土の遺物である。土師器高坏(50)や中世段階の白磁(47)、近世段階における中国漳州窯の染付(51)や景德鎮の染付(64)がある。

【溝状遺構出土遺物】(第10図)

60～65は2条の溝状遺構出土遺物である。古代段階のものから近世段階までのものが混在する。

【包含層出土遺物】(第11・12図)

66～92は包含層出土の遺物である。近世の肥前の碗が多いが、大型の青磁皿(67)や関西系の片口鉢(66)、薩摩の碗(73)、肥前現川窯の変形皿(70)、中国福建省の白磁(82)、肥前の紅皿(76・79)、瓦質土器(87)等、多様な陶磁器類が出土している。また近世以外のものとして古代の土師器碗(88)、東播系の鉢(86)がある他、薬莖付きの小銃弾(92)も出土している。

【攪乱出土遺物・表採資料】(第12・13図)

93～104は攪乱出土の遺物、105・106は表採資料である。特筆すべきものとして肥前の輪花大皿(93)、関西系の土瓶(95)のほか、製作時に歪みが生じたと思しき肥前有田の皿(99)や、同安窯系青磁(101)などがある。

表1 出土遺物観察表①

No.	種別	器種	出土遺構	法量			産地	年代	その他
				口径	底径	器高			
1	磁器	皿	確認調査	(11.6)	(4.8)	4.2	中国	16c末か	畳付、粉溶着 福建省漳州窯
2	青白磁	合子蓋	確認調査	(7.4)	-	2.1	中国	鎌倉時代	
3	染付	蓋	確認調査	(8.4)	-	2.1	肥前	18c末～19c中	
4	染付	広東椀蓋	確認調査	(9.9)	(5.4)	2.2	肥前	1820～1860年	「太明年製」
5	染付	椀	確認調査	10.1	4.8	5.4	肥前	18c後	雪の輪文様
6	磁器	椀	確認調査	(8.8)	(3.6)	4.5	肥前	18c後	
7	磁器	椀	確認調査	-	(6.1)	-			
8	陶器	線香立てか	確認調査	(13.2)	(6.7)	-	肥前	17c後～18c前	焼成不良
9	染付	皿	確認調査	(12.3)	7.2	3.2	肥前	1820～1860年	
10	磁器	皿	確認調査	6.7	2.5	3.5	肥前		紅皿か
11	土師質	土玉	確認調査	-	-	-			
12	土師器	坏	確認調査	(8.9)	7.5	1.2			糸切底
13	土師器	皿	確認調査	11.9	7.5	3.4			糸切底
14	磁器	根付け	SC1	-	-	-	平戸三川内	19c	足長蜂
15	磁器	広東椀	SC1	(10.9)	-	-	肥前	1780年～19c初	波千鳥の文様
16	土師器	坏	SC1	-	(7.8)	-			糸切底
17	磁器	椀	SC2	(9.8)	(3.6)	4.5	肥前	18c前	銅緑釉
18	磁器	椀	SC2	(11.0)	-	-	肥前	18c前～中葉	
19	磁器	皿	SC2	(12.1)	-	-	肥前	18c前～中葉	波佐見系
20	磁器	小広東椀	SC2	-	(3.6)	-	肥前	1770～1810年	焼成不良
21	白磁	猪口	SC2	-	(2.4)	-	肥前 有田	18c前	型打ち成形
22	土師器	火炉	SC3	-	(8.6)	-			糸切底
23	陶器	挿り鉢	SC3	(23.9)	-	-	薩摩	19c頃	
24	染付	小椀	SC3	8.7	3.3	5.0	肥前か	19c初～幕末	
25	染付	椀	SC3	(10.2)	-	-	肥前	1820～1860年	
26	磁器	高小丸椀	SC3	6.4	3.2	5.3	肥前	1820～60年	
27	染付	筒形椀	SC3	(7.4)	-	-	肥前	18c後頃	
28	磁器	蓮華	SC3	-	-	-	肥前	19c初～中	型押し成形
29	磁器	椀	SC3	(7.0)	(4.2)	3.9	肥前	1820～1860年	焼成不良
30	青磁	小香炉	SC3	5.4	3.1	4.8	肥前	17c後～18c前	
31	瓦質土器	火鉢か	SC3	-	-	-			
32	陶器	壺か	SC7	-	-	-	肥前	17c中～18c前	
33	陶器	皿	SC7	10.2	4.1	4.2	薩摩	18～19c前	鉄釉
34	青磁	椀	SC10	16.1	5.0	6.8	中国	14c	龍泉窯系 完形
35	土師器	坏	SC10	8.1	5.3	1.6			糸切底
36	土師器	坏	SC10	(8.9)	6.5	1.5			糸切底
37	陶器	壺か	SC11	(31.4)	-	-	薩摩	17c前	貝目
38	磁器	皿	SC11	(12.0)	-	-	肥前	17c後	有田
39	磁器	筒型椀か	SC11	(10.0)	-	-	肥前	17c前か	
40	白磁	皿	SC11	(10.0)	-	-	肥前	18c後～19c	
41	白磁	小杯	SC11	-	3.2	-	肥前	18c末～19c前	
42	土師器	坏	SC11	(8.2)	(5.8)	2.1			ヘラ切底
43	土師器	坏	SC14	-	(7.5)	-			糸切底
44	土師器	坏	SC17	(8.6)	(7.2)	0.9			ヘラ切底
45	磁器	皿	SC18	(14.4)	-	-	肥前か	17c	
46	陶器	天目茶碗	SC18	(11.0)	-	-	瀬戸美濃	16c末～17c前	
47	白磁	椀	SH4	-	(7.0)	-	中国	12～14c前	
48	土師器	坏	SH5	(9.0)	(6.0)	1.5			ヘラ切底
49	磁器	椀	SH7	(13.0)	-	-			
50	土師器	高坏	SH14	-	-	-			
51	染付	椀	SH8	-	-	-	中国	16c後～17c初	福建省漳州窯
52	磁器	椀	SH16	(10.8)	4.7	6.3			
53	陶器	皿	SH16	12.5	-	-	肥前	1610～1630年	
54	染付	皿	SH16	-	4.1	-	中国	16c末～17c初	巻貝文様 福建省漳州窯

表2 出土遺物観察表②

No.	種別	器種	出土遺構	法量			産地	年代	その他
				口径	底径	器高			
55	染付	椀か	SH19	-	(5.4)	-	中国 景德鎮	16c後～17c初	
56	陶器	椀	SH21	-	4.2	-	肥前	17c後～18c前	
57	土師器	鉢	SH23	-	-	-			
58	陶器	壺	SH23	(16.2)	-	-	薩摩	17c前	薩摩初期 貝目
59	磁器	椀	SH23	(9.6)	-	-	中国	16c末～17c前	福建省漳州窯
60	土師器	甕	SE1	(15.4)	-	-			
61	陶器	小坏	SE1	(8.6)	-	-	肥前	17c後～18c初	銅緑釉 内野山窯
62	土師器	椀	SE1	-	-	-			花卉状圧痕
63	陶器	皿	SE1	-	3.4	-	肥前	1600～1630年	
64	磁器	小杯	SE1	(6.2)	-	-	肥前	17c後	
65	土師器	甕	SE2	-	-	-			
66	陶器	片口鉢	包含層	18.0	8.5	8.4	関西系	19c	
67	青磁	皿	包含層	(18.6)	6.7	(8.3)	肥前	1630～40	波佐見ないし有田
68	磁器	皿	包含層	(13.5)	(7.6)	4.5	肥前	18c後	
69	陶器	皿	包含層	(10.8)	(4.6)	(2.7)	肥前	1590～1610年	胎土目積み
70	陶器	皿	包含層	-	-	-	肥前	18c前	現川窯
71	磁器	椀	包含層	12.1	4.5	5.4	肥前	18c中	波佐見
72	陶器	椀	包含層	(9.3)	(3.3)	5.3	薩摩	18c後～19c前	関西系の薩摩
73	陶器	椀	包含層	(9.3)	4.4	5.0	薩摩	18c後～19c前	
74	磁器	蓋付鉢	包含層	(9.6)	(6.0)	7.4	肥前	18c前	
75	磁器	小椀	包含層	8.5	4.2	4.7	肥前系	1820～1860年	
76	磁器	紅皿	包含層	7.2	2.7	3.1	肥前	18c後	文様笹
77	磁器	皿か	包含層	(9.0)	(4.0)	3.6	肥前	18c後	
78	磁器	小椀	包含層	(8.1)	(2.4)	3.9	関西か	19c前～中葉	
79	磁器	紅皿	包含層	(6.1)	(2.7)	2.6	肥前	18c後	文様笹
80	白磁	小杯	包含層	(5.8)	2.6	3.8	肥前	1640～50年頃	
81	磁器	猪口	包含層	(7.6)	(5.4)	5.9	肥前	18c後	
82	白磁	椀	包含層	(7.9)	(3.2)	4.3	中国	18c後～19c前	口剥げ 福建省
83	磁器	小坏	包含層	(6.4)	(2.6)	3.3	肥前	18c	
84	白磁	小杯	包含層	(6.0)	2.4	3.3	肥前	17c後	
85	白磁	小坏	包含層	(6.0)	2.2	2.4	肥前	18c	
86	須恵器系	鉢	包含層	(31.2)	-	-			東播系
87	瓦質土器	小羽釜	包含層	(9.4)	-	7.6		近世	
88	土師器	椀	包含層	-	(7.4)	-			
89	土師器	坏	包含層	9.0	6.6	1.4			ヘラ切底
90	土師器	皿	包含層	(6.0)	2.2	2.4			
91	磁器	小壺	包含層	-	(2.3)	-	肥前	18c頃	型押し成形 貼り合わせ
92	銃弾		包含層	-	-	-			
93	磁器	大皿	攪乱	(28.0)	-	-	肥前	18c末～19c前	輪花大皿 有田
94	陶器	播り鉢	攪乱	(31.1)	15.5	11.4			
95	陶器	土瓶	攪乱	6.8	8.8	6.1	関西系	19c	
96	磁器	鉢	攪乱	(13.2)	(7.6)	4.2	肥前	18c中～末	波佐見系
97	青磁	椀の蓋	攪乱	(9.2)	(3.4)	3.0	肥前	18c後	コンニャク印判
98	磁器	鉢	攪乱	(17.0)	-	-	肥前か	19c初～中	蝙蝠の文様
99	磁器	皿	攪乱	-	-	-	肥前	18c	失敗作か 有田
100	青磁	椀	攪乱	(11.9)	(4.5)	6.6	肥前	18c後	コンニャク印判
101	青磁	皿	攪乱	-	(4.5)	-	中国		同安窯系
102	磁器	小杯	攪乱	(5.3)	3.4	3.0	肥前	1780～1810年	
103	白磁	盃(小皿)	攪乱	(5.8)	(2.8)	2.5	肥前	19c初～中	
104	磁器	小杯	攪乱	(7.0)	(2.8)	(2.8)	瀬戸・美濃か	19c	
105	陶器	椀	表採	(10.8)	3.8	4.7			
106	石製品	臼	表採	-	-	-			

第Ⅲ章 総括

今次調査においては、近世を主とした土坑や掘立柱建物、溝状遺構等が検出された。調査箇所には、先述のとおり明治初期に建てられた吉富家住宅が近年まで存在していた。調査においては武家住宅に関連する遺構の存在を期待したが、複数回にわたる削平、造成があったと見られ、遺構の残りも悪く、残念ながら武家住宅の復元等に直結できるものはなかった。

ただし、狭小な調査面積にもかかわらず近世陶磁を中心とした遺物の出土は非常に多く、また興味深いものも含まれる。肥前のものが主を占める中にも、薩摩や関西系の製品も含まれ、当時の広域な流通網の存在を想起させる。また高級品として知られる肥前現川窯の製品や、製作段階で歪みが生じた失敗品であるにも関わらず、そのまま製品として流通しているものなども見受けられた。

また完形の龍泉窯系青磁椀や同安窯系青磁など、中世の輸入陶磁が出土した他、東播系の鉢や古代の土師器椀など、近世以前の遺物も少数含まれている。高岡麓遺跡の過去の調査でも、数は多くないものの、近世以前の遺物が出土しており、これまでの調査では明確になっていないものの、今後は、これら薩摩藩の外城としての高岡麓以前の本遺跡の性格についても、調査、検討を行っていく必要がある。

調査後、敷地内には所有者から寄贈を受けた武家住宅、旧本吉家住宅が移築復元され、高岡麓の雰囲気や今に伝える空間となっている。



調査箇所現況（移築復元された武家住宅）



図版1 調査区全体遺構検出状況（西より）



図版2 調査区全体完掘状況（西より）



図版3 調査区全体完掘状況（北東より）



図版4 表土剥ぎ作業風景



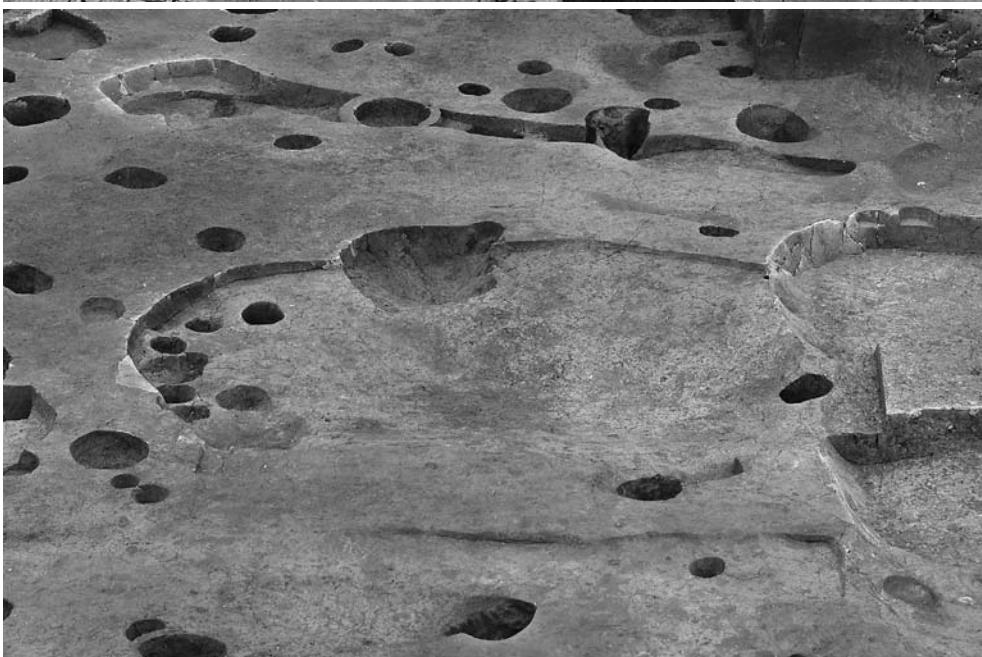
図版5 掘り下げ作業風景



図版6 SC2検出



図版7 SC2掘り下げ



図版8 SC2完掘



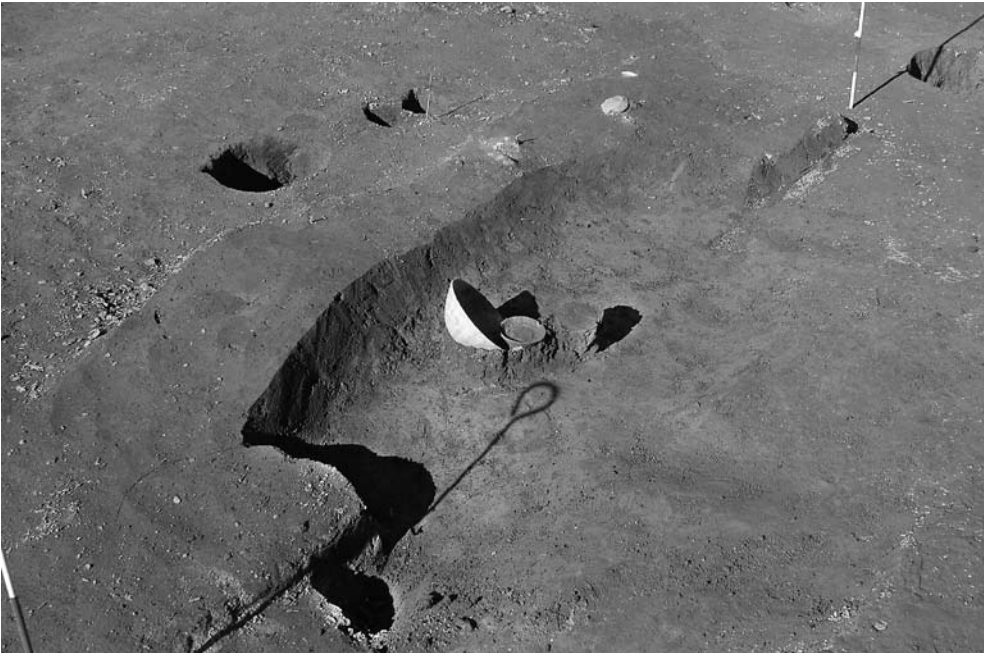
图版9 SC1·7·15



图版10 SC3



图版11 SC9



图版12 SC10



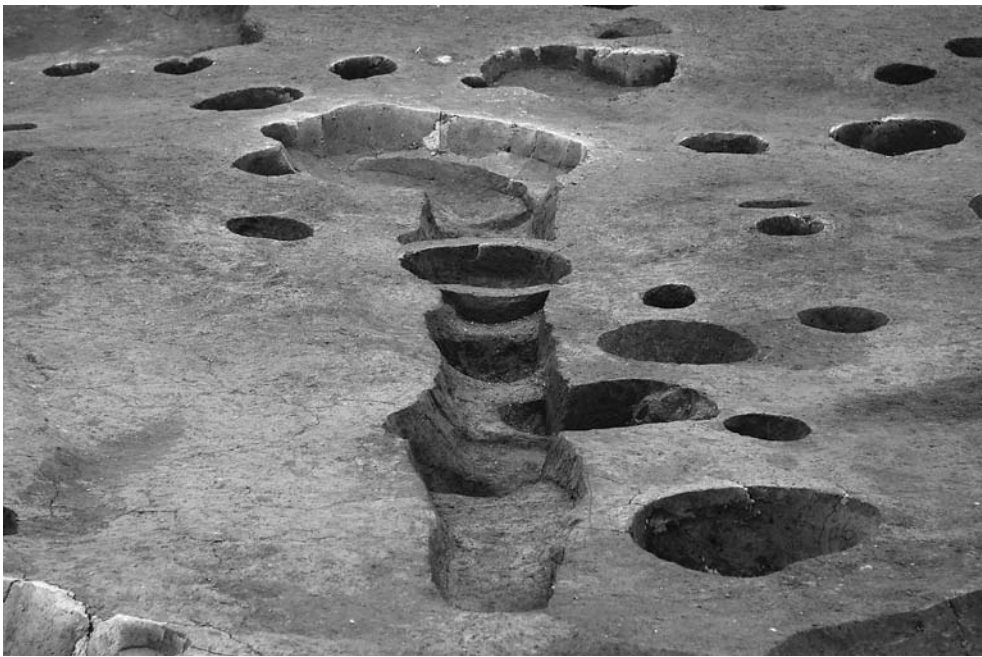
图版13 SC11



图版14 SC16·17



図版15 S E 1



図版16 S E 2



図版17 調査区南北
ベルト



図版18 確認調査時出土遺物



S C 10出土遺物



図版19 土坑出土遺物



図版20 ピット出土遺物



図版21 溝状遺構出土遺物



图版22 包含层出土遗物



图版23 攪乱出土遺物



图版24 表採資料

報 告 書 抄 録

ふりがな	たかおかふもといせきだい33ちてん
書名	高岡麓遺跡第33地点
副書名	歴史的まちなみ整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第95集
編著者名	竹中克繁
編集機関	宮崎市教育委員会
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橋通東1丁目14番20号 TEL (0985) 21-1836
発行年月日	2013年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかおかふもといせき 高岡麓遺跡 第33地点	みやざきけんみやざきし 宮崎県宮崎市 たかおかちやま 高岡町内山 2879番地	45201	34-006	31°57'25" 付近	131°17'53" 付近	2008.11.20) 2008.12.25	236	武家住宅 再築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高岡麓遺跡 第33地点	散布地	近世	土坑、掘立柱建物、 溝状遺構	陶磁器	完形の龍泉窯系青磁椀出土

宮崎市文化財調査報告書 第95集

高岡麓遺跡第33地点

歴史的まちなみ整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年3月

発行 宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書 第95集

高岡麓遺跡第33地点

歴史的まちなみ整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年3月

発行 宮崎市教育委員会